クロスロード新聞

第4号

2006 年5月8日

連休明けのお楽しみ
第4号が完成です！

発行元：108-8345　港区三田2-15-45　慶應義塾大学商学部
吉川肇子研究室内
クロスロードサポーター事務局

呉から岸和田から

全国に広がるクロスロードの輪。今号では、前号に引き続き広島県呉市での実践と、大阪府岸和田市での実践をご報告いただきます。

呉市の報告は、前号の林さんのご報告につづき、行政の立場から森島さんがご報告下さいました。2ページからご紹介です。また、3ページからのクロスロード裏話では、要援護者編の解説を掲載しました。実施の際の参考にしていただければ幸いです。

岸和田市では、津波防災ワークショッププログラムの一部としてクロスロードをご活用下さいました。クロスロード単独での実施ではない使い方の一例として、ご紹介します。読むべし4ページ！

めざせ16%！

防災意識がなかなか広まらない、耐震補強がなかなか進まないとお悩みのあなた！普及が劇的に進む魔法の数字、16%をご存じですか?「こんなところに心理学(4)」で解説です。

その裏ページにはなんと、連続で「こんなところに心理学(5)」が！

クロスロードの新作問題：みんなの意見はどっち?

クロスロードを継続的に実施してくださっている愛知教育大学の杉浦淳吉先生の学生さんが新作問題を考えてくれました。あなたの答はイエス?ノー?学生の答えは?結果は次号で大大的に発表です。

あなたは	ジレンマ
パン屋の店員	客席で、お客さんが自分の店のパンを買って食べているが、飲み物は、違う店で買ったものを飲んでいる。「当店の商品以外の飲食はご遠慮下さい」と書いてあるのに。注意する？
小学校の教頭	４年３組の担任が欠勤。一日代理を務めることに。しかし、このクラスは学級崩壊状態であった。…授業中突然一人の児童が教室を出ていった。連れ戻そうと声をかけるが全く聞かない。教室を離れその子を連れ戻しに行く？
長男の嫁	姑が突然認知症になり、介護が必要な状態になった。あなたにも仕事はあるが長男の嫁であるあなたは親戚一同から当然のように介護をするものだと思われている。近くには老人の施設がある。老人施設へ入所させる？
25歳女性平社員	今日は、会社の上司や同期の社員が集まる飲み会。あなたの嫌いな上司がさりげなくあなたを隣の席に呼んでいる。しかし、上司の機嫌をとらないとその場の空気が悪くなるかもしれない。上司の隣に座る？
バスの乗客	バスで駅まで急いで向かっていたが、交通事故による大渋滞に巻き込まれ、進まなくなった。ここから駅までは徒歩30分以上かかる上、天候も悪い。バスがすぐ動く気配はない。バスを降りて駅まで歩く？
中学生	クラスメイトのＢ君が教室で5～６人の男子生徒にいじめられている場面をあなたは目撃した。Ｂ君は悲痛な様子である。あなたはすぐさま助ける？それとも助けない？
新車購入を検討している人	環境のことを考えるとハイブリッド車や燃費の良い車を選ぶべきですが、昔から憧れていたのはスポーツカーのような馬力のある車です。この先何年も使う車なのでやはり自分の好みの車を買う？

目次

呉から岸和田から　1
めざせ16%　1
大学生が新作問題を！　1
要援護者編呉市での実践　2
要援護者編こんな意見あんな意見　3
津波防災ワークショップで実施　4
こんなところに心理学(4)　5
備えの壁　5
こんなところに心理学(5)　6
おいらオピニオン・リーダー!?　6

クロスロード次号のご案内
発行予定日：７．１４．
海の日前のおたのしみ、カード解説も充実です。

責任編集

- チームクロスロード
- クロスロード・サポーター
- SPECIAL THANKS:
  高知県危機管理課
  小溝　智子（漫画企画）

呉市での要援護者編実習会報告第2弾：行政の立場から

クロスロード新聞第3号でご紹介しました「要援護者編」の研修会について、今回は行政の立場から、呉市の森島様より講評をいただきました。当日使用したクロスロード新作（3ページ参照）と共に、ご紹介します。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

前回，広島県呉市で開催されました「要援護者編の実習会」について，呉市消防局の林さんから紹介がありましたが，今回行政の立場から報告させて頂きます。

呉市は度重なる被災の中，「災害福祉」について模索していましたが，どこの行政にもみられる縦割りの弊害により，防災部門，福祉部門の思いが連携せず，これと言った対策を講じられずにいました。

そんな中，呉市消防局の林さんから「クロスロードの制作者である矢守先生，吉川先生が災害時要援護者編を作成中で，福祉関係者を対象に「要援護者編」の実習会を開催し，意見を抽出したいというもので，是非呉市で協力したい」というお話を頂きました。

しかし，呉市でこれを実行するには当然，防災部門と福祉部門の協力体制が必要となってくることから担当者レベルの私は二の足を踏んでおりましたが，林さんから「要援護者対策を考えて行く上での切り口になるのでは？」「クロスロードは，分かれ道じゃなく，人と人が出会う場所」「呉市に対して熱い思いを持ったもの同士が集まれば，何かが始まる！」と勇気づけられました。正直行政担当者としては，災害現場で実際に苦労された方々を前に何を語れば良いのか，やり玉に挙げられるのでは？と言う気持ちがない訳ではありませんでしたが，社会福祉協議会の近藤さんから「行政と市民の間を取り持つのが私たちの役目」「任せてください」「その代わり逃げないでくださいよ！」という言葉に，安心と緊張と責任を感じながらも，とにかく呉市民のためになることなら一歩でも前へ進めばそれで良し！それに，両先生に会いたいという気持ちが自分の力になりました。

「案ずるより産むが易し」の諺とおり，私の心配をよそに，白熱した議論が交わされ，お互い知らなかった事や経験談，各地の取組など「長いかな？」と思っていた実習時間もあっという間に過ぎ，両先生の進行，解説で会場はいつの間にかひとつになっていました。

「災害時要援護者の支援については，参加者の皆さんは本気でかかって来る！」

「中途半端な考え方や思いでは，受け入れられない！」と社会福祉協議会の近藤さんから言われていたとおり，皆さんの呉市に対する気持ちに，心が熱くなって来ました。

クロスロードの意味の一つ「人びとが出会い，言葉を交わす場所」という意味を実感した研修でした。

縦割り行政の弊害と言って逃げていては何も始まりません。組織と組織，人と人を結びつけるこのクロスロードを活用し，問題点の抽出や意見交換の場を持ち，要援護者支援対策に積極的に取り組んで行きたいと考えています。

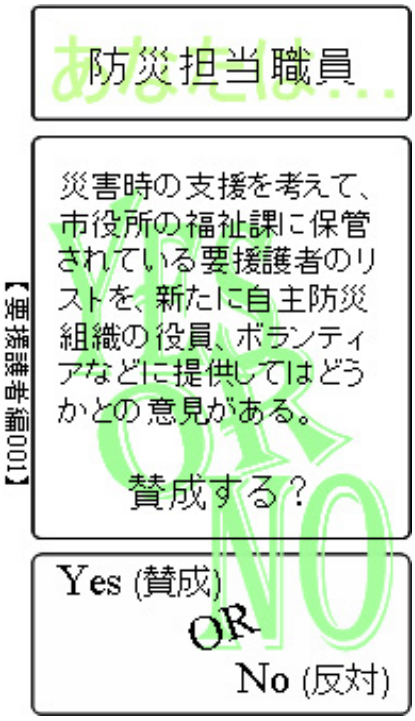
呉市では，２００４年１２月から「市職員防災研修」の中で，クロスロードを取り入れ，３月までに延べ約３００人の職員と楽しんできましたが，今年度から職員研修はもちろん，「市民編」また今後作成される「要援護者編」を活用し，自主防災組織，小学校，中学校の防災教育を実施してみたいと思っています。ありがとうございました。

（呉市総務部安全対策課
森島和雄さん）

呉でこんなものを見つけました：戦略ゲーム「軍人将棋」(写真下)と、造船パズル(写真右)（呉市大和ミュージアムにて）

連休明けのお楽しみ
クロスロード新聞第4号

クロスロード裏話：要援護者編、こんな意見が出ています



要援護者版001は、一般編2014の姉妹編です。

このカードについて、これまでにどのような賛成意見、反対意見が出てきたのか、まとめてみましょう。

まず、YES（賛成）の理由・根拠としては、

・防災（命）に関わることだから、必要なことは何でもすべき
・災害時要援護者の被害は、今も非常に多くこれからも増える
・災害時だけでなく、ふだんのお世話にも役立つ
・何でも自治体任せの時代は終わった。これからは民がやらねばならない

などでしょうか。また、

・地元の民生委員などはいいが、他地域から来るボランティアまでは…
・本人の同意が絶対条件
・リストをもつ者から取り扱いに関する誓約書などをとる

といった条件付という意見もあります。

逆に、NO（反対）の理由・根拠としては、

・プライバシー保護の観点から不可能だ
・個人情報の目的外使用に該当する恐れがある
・リストが悪徳業者などの手にわたる恐れがある
・かえって自治体（行政）の責任放棄につながらないか
・「あなたがこの人を助けねばならない」といった責任が生じるのは民には似つかわしくない

などがでています。

この問題については、全国の自治体も対応が遅れているのが現状です。朝日新聞の調査（2006年1月）によれば、全国の主要71自治体のうち、「防災目的の台帳はない」が55%、「行政組織内で台帳を作成・共有し外部提供はなし」が21%と、この２つで全体の4分の3を占めています。

一方、「本人同意を得て台帳作成」は8%、そして、「本人同意を得て台帳（リスト）を作成し自主防災組織などに提供」しているのは15%に過ぎません。

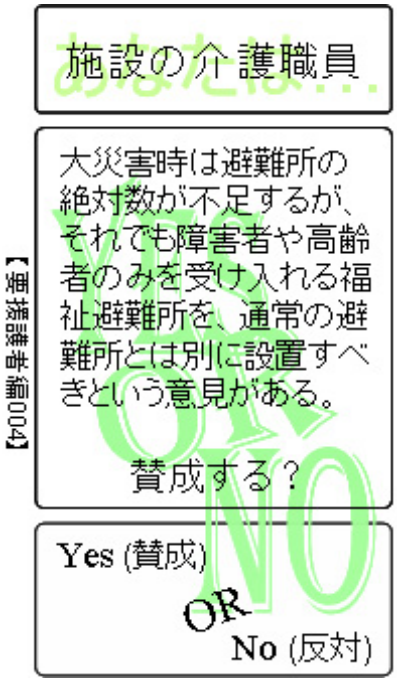
また、2004年の台風23号の被災地豊岡市で障害者を対象に実施されたアンケートで、こうしたリストへの登録希望が299人中166人（約56%）にとどまるなど、該当者の意向も必ずしも一枚岩とは言えません。

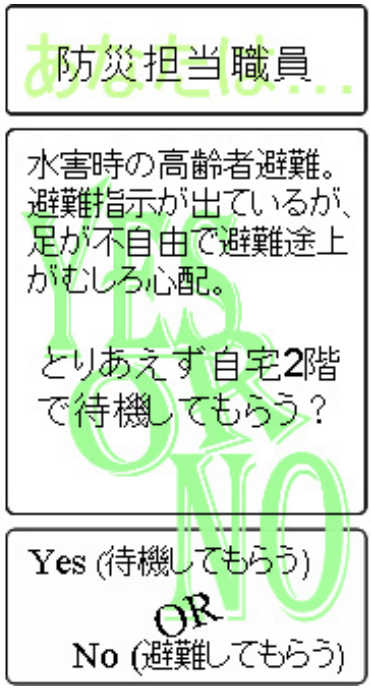
しかし、2004年10月中越地震の死者48名中、65歳以上が27名（56%）（2005年７月1日現在）、2004年１年間の風水・土砂災害による死者238名中、65歳以上が126名（53%）を占めるなど、災害時の要援護者に対する防災対策は待ったなしの課題です。

この問題に関して、本年3月28日、内閣府は「災害時要援護者の避難支援ガイドライン」を公表しています。そこでは、「平常時からの要援護者情報の収集、共有が不可欠である」としています。個人情報の保護という懸案についても、たとえば、福祉目的で入手した情報を避難支援に利用した場合、たとえ本人の同意が得られなくても、明らかに本人の利益となり、「保護法上の個人情報の目的外利用が可能な例に該当する」と、これまでよりも踏み込んだ解釈を示しています。

最終的には、「リストだけあっても仕方ない」、「少数の人だけがリストを持っていてもダメ」というご意見にみられるように、デイケア、訪問介護といった日常的な福祉活動、あるいは、防災マップづくりなどの日常的な地域防災活動を通して要援護者の存在をみなが知ることが、回り道のようで一番確かな方法かもしれません。こうした草の根の動きと自治体が所管するリストとを上手に組み合わせて互いが互いを補完する関係を作りたいものです。

要援護者編、他にもこんな問題が。目的にあわせてお使い下さい。





クロスロードを用いた、「津波防災まちづくりワークショップ」の紹介

クロスロードを防災ワークショップのプログラムの1つとして組み入れた形での使い方をご紹介します。お使いいただいた報告を大阪府からお送りいただきました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

大阪府では、平成17年度に「だんじり」で有名な岸和田市の浜校区をモデル地区として、住民参加による津波防災マップの作成などを目的としたワークショップを開催しました。

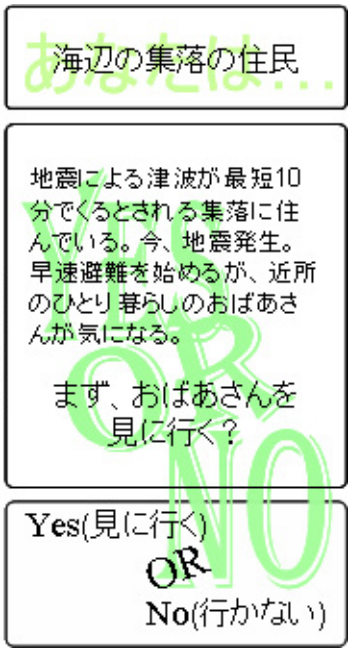
府の津波浸水シミュレーション結果から、岸和田市域では南海地震により防潮堤に設置された水門や陸閘が閉まらなかった場合、最大2m程度の浸水被害が発生することが予想されました。そこで、市では平成16年度に津波ハザードマップを策定・公表するとともに、全戸配布されました。

今回のワークショップは、このハザードマップを元に、町内会ごとの防災マップの作成や、自助・共助といった防災ルールを、住民自らが話し合いで取り決めることを目的として、地震による家屋の倒壊による避難路の分断などを予測する「防災まちづくり支援システム」も活用しながら、計3回行いました。

前置きが長くなりましたが、このワークショップの導入において、防災ゲーム「クロスロード」を活用させていただきました。

ワークショップには、ゲームの発案者である京都大学の矢守先生をコーディネーターとしてお願いし、まずは、クロスロードのゲームの説明を行っていただきました。ワークショップの参加者は、地元町内会の役員や婦人会のメンバーが中心で、各班５～８名で７班、約５０名が参加くださいました。府、市の職員はファシリテーターとして加わり、ゲームの進行のお手伝いをしました。

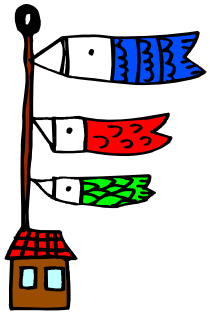
スケジュールの関係で、利用したカードは右の１種類のみとなりましたが、なかなか難しいテーマで、Yes、No拮抗する結果となり、クロスノートで各自の意見を話し合った時には様々な意見が出ました。浜校区では、ゲームでは１０分だった津波来襲までの時間が、９０分と想定されているので、引き続き行った議論では、その時間の中で自助・共助として何が出来るかを話し合いましたが、ゲームを行った事により参加者が発言することに対し、抵抗がなくなったように感じられました。また、思考を防災の難しさを考える方向に向かわせる良い問題でしたので、引き続き行った、防災マップ作りや、防災ルール作りへも生かされたと思います。



【市民編5003】

最後に、ワークショップにご協力いただきました、京都大学防災研究所の岡田先生、矢守先生、大学院のみなさん、群馬大学の片田先生にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

（大阪府港湾局　看舎邦亮さん
総合計画課　矢倉マヤさん）



ゲームの説明

(写真左)クロスロードの様子

(写真右)ワークショップで行ったまち歩き（矢守先生が車椅子を押して歩かれました。）

こんなところに心理学(4)：めざせ16%！

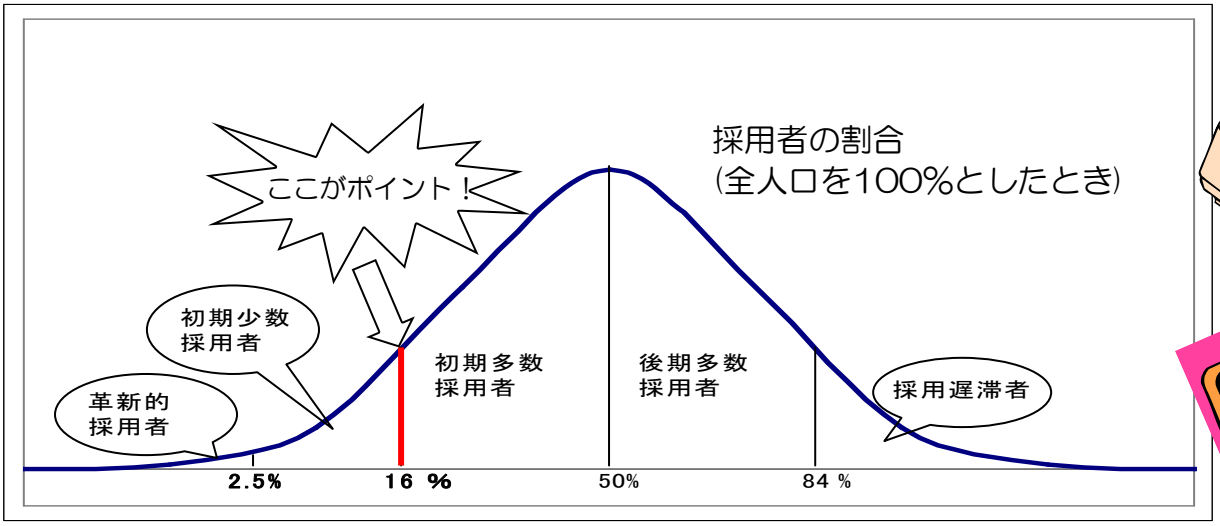
心理学では「普及」や「流行」を研究している人たちがいます。ものや技術は、どのようにして人々の間に広まっていくのでしょうか?この研究での一大発見が「普及曲線」(下の図参照)です。

人々の中には新しいモノや流行ににすぐに飛びつく人と、そうでない人がいますよね。いろいろなものの普及を調べてみると、その人たちの割合は、どんなものでもほぼ一定だということがわかりました。下のグラフを見てください。最初に飛びつく人(「革新的採用者」と言います)は、全体の2．5%、それに続く人(「初期少数採用者」)が13．5%、この2つをあわせて16%となります。

実はこの16%という数字が大切なのです。採用する人が16%を超えると、ものの普及や流行が格段に進むことがわかっています。普及曲線が発見された最初の研究は、農村での新しい農業技術の普及についてでしたが、その後新製品の普及などでもほぼ同じような普及の経過があることがわかってきました。たとえば自動食器洗い機。発売されたのは1960年でしたが、なかなか普及しませんでした。1990年代からようやく普及の兆しを見せ、一昨年14%去年15%の普及率で、いよいよことし16%の普及率を超えると予測されています。お宅も「そろそろ買おうか」というお話になってはいないでしょうか?

さて問題の防災への意識です。自宅を耐震補強している人、避難訓練に参加している人、住民全体の何パーセントか、把握していらっしゃいますか?防災意識を住民全体に広めるためには、最初から100%をめざすのではなく、この16%の壁を越えることを目標にされたらどうでしょうか?

まず16%の人を動かす。その方法についてのヒントをこのページの裏でお話しします。



備えの壁

©やなせたかし

こんなところに心理学(5)：16%を越える秘訣

16%をめざせばいいことはわかったけれど、ではどうやったら16%の普及率が達成できるのでしょうか?そのためには、「革新的採用者」と「初期少数採用者」がどんな人たちかを理解することが大事になります。

「革新的採用者」(2．5%)とは、常に冒険的で、新しいアイディアやモノを誰よりも早く採用することに熱心な人たちです。しかし、この人たちは、ものごとが広く普及するかどうかには影響を及ぼさないと言われています。「マニア」とか「オタク」ということばが近いかも知れませんね。

これに対して、「初期少数採用者」は、普及の鍵を握るといわれています。この13．5%の人たちは、オピニオン・リーダーとも呼ばれています。オピニオン・リーダーとは、まわりの人たちから尊敬されており、「あの人の意見は信用できる」とか「あの人が使っているならいいものだろう」と、その意見がまわりの人たちから信頼されている人たちのことを指します。みなさんの身の回りでも、「電化製品を買うときにはあの人の話を聞いてからにしよう」とか、「洋服を買うときには、〇〇さんのアドバイスを聞いておこう(今の流行はどんなかな?)」という人はいませんか?そういう人がオピニオン・リーダーなのです。革新的採用者に比べていうなら、「おしゃれ」だけど「おしゃれすぎない」。このほどよい感じが信頼を得る秘密なのです。

オピニオン・リーダーは、新しいモノを取り入れるのが早い人たちですが、友人・知人も多いことが知られています。人間関係は、あたかも蜘蛛の巣のようにつながっているものですが、そのつながりの中で、中心にいる人と考えるとよいでしょう。ですから、オピニオン・リーダーに情報を伝えれば、そのまわりの人たちには、自然と情報が伝わっていくことになります。

防災の知識も同じです。地域のオピニオン・リーダーを捜して、その人たちに、まず理解してもらうようにすることが大事なのです。その人は、必ずしも防災についてのオピニオン・リーダーである必要はありません。たとえば、幼稚園の保護者の中で輪の中心にいるお母さん、職場の人気者、そういう人がいいのです。その人に防災知識が伝われば、あとは口コミが威力を発揮します。

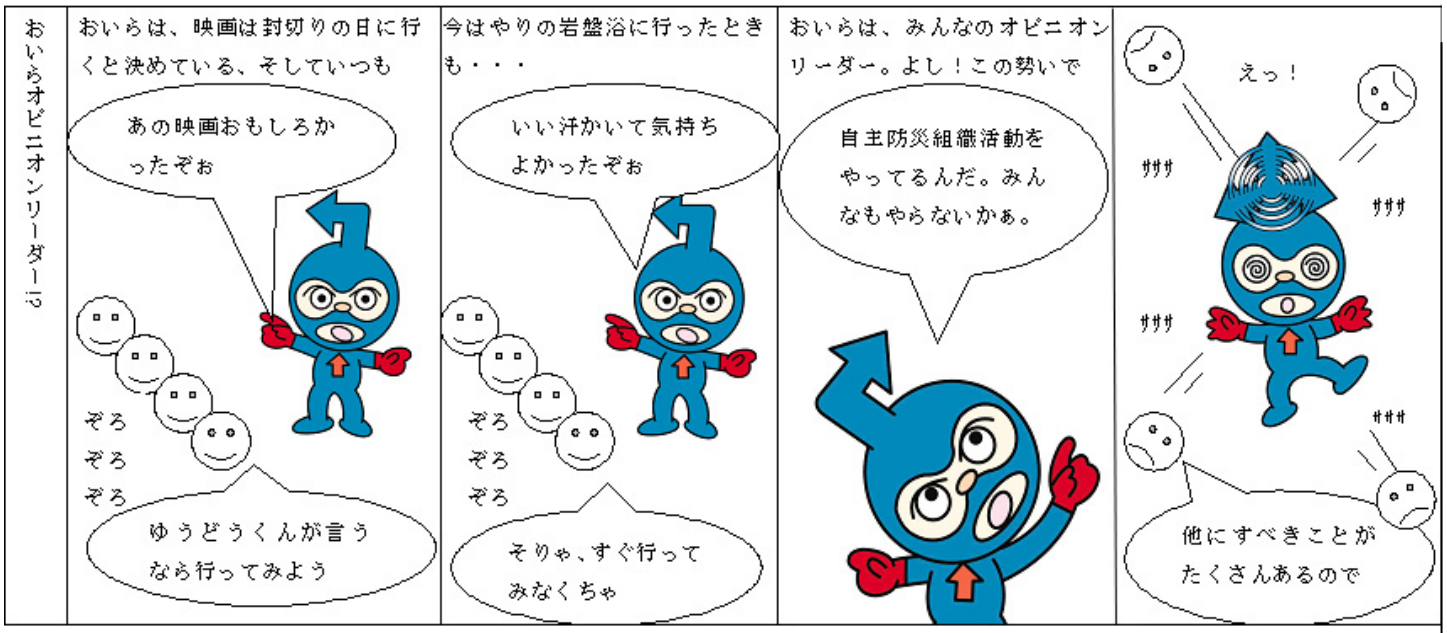
このテクニックを大いに活用しているのが、女性雑誌。「新製品を試してみました」というタイトルで、主婦グループが新製品を使ってみる記事がよく載っています。でもこの記事の本当の目的は、新製品のテストではなくて、普及なのです。このテストをした主婦たちが、口コミで新しい商品を伝えていくのです。

このやり方で大成功したのが花王のクイックルワイパー(右の写真)。みなさんのおうちにも1つおいてあるのではないでしょうか?

目には見えにくい人間関係のネットワーク。その中心にいる人をじょうずに探して、防災知識を広めていきましょう。

おいらオピニオンリーダー!?

©やなせたかし



（制作者から）どんなテーマでも、オピニオンリーダーになれるってわけじゃないのね。
でも、がんばれゆうどうくん。地震に負けない未来に、その頭の矢印で、みんなを導くのだ！！
(クロスロード事務局から)ゆうどう君、防災のオピニオンリーターになれるコツ、次回伝授します。こうご期待！